

団塊のカタログ

トシタロー・クラフィティ

引き続き、しつこくも背景は昭和31年。

王様と私

作詞**オスカー・ハマースタイン二世**、作曲**リチャード・ロジャース**の数多い傑作ミュージカルの一つが**王様と私**である。

舞台はシャム（タイ）、その王様に**ユル・プリンナー**、その子らの家庭教師アンナに**デボラ・カー**、この2人にいつしか愛が芽生えるといったありきたりのストーリーだが、王様が死んでしまうラストが暗いし、**シャル・ウィ・ダンス**以外にこれといった曲もない。

そんなこんなであまり好きなミュージカルではないが、1985年（昭和60年）10月、65才肺ガンで亡くなったユル・プリンナーの最後の舞台主演作として名を残している。

観客の万雷の拍手に応え、手を振る姿が実に堂々としていて、死期間近な人間にはとても見えず、映画の時の王様姿より貴禄があつて思わずゾクツとしたくらいだ。

蛇足だが、プリンナーはなぜか王様役が多く、他にも**ソロモンとシバの女王**のソロモン王、**十戒**のラメセス王がある。

この映画のデボラ・カーは実は口パクで、歌の吹き替えは別にいた。この歌手、その後**ウエストサイド物語**ではナタリー・ウッド、**マイフェアレディ**ではオードリー・ヘップバーンと、大女優の歌声を担当したもののそこは裏方の悲しさで名前と顔が出てくることはなかったが、ロジャース＝ハマースタインの最高傑作**サウンド・オブ・ミュージック**で

ついに正体を現わす。冒頭で修道院長と^{シスター}尼さん5人が歌う場面（マリア）があるが、その中で♪When I'm with her, I'm confused…と歌っているシスター・ソフィアがそうだ。

彼女の名は**マーニ・ニクソン**、タイトルバックにもMarni Nixonと出ているが、あらためてビデオで聞き比べると確かに**トゥナイト**のマリアと**シャル・ウィ・ダンス**のアンナと**踊りあかそう**のイライザと同じ声である。

白鯨

一頭の大鯨を追いかける海の男の執念を描いたのが**白鯨**、メルビル（1819～91年。アメリカ）原作の映画化である。

舞台は19世紀のアメリカ、**グレゴリー・ペック**演じる老船長エイハブが一応主役だが、白い悪魔と恐れられている巨大な鯨が真の主役といって良い。鯨の名前は**モビー・ディック**（米俗語でMOBYはデカイ、DICKは悪魔）、原題でもあるが語感が可愛いすぎるので日本語のハクゲイの方がシックリする。

はるかに悪役っぽい名前のエイハブ船長はかつてこの大鯨に片脚を奪われた苦い思い出があつて、心にリベンジを誓っている。

大海原を舞台に物語は展開するが、ほとんど世界一周した後、ついにエイハブ船長の執念は実を結び、あのモビー（ロビー君みたいで可愛いでしょ）をついに発見する。

目指すカタキをやつと見つけたというよりも、なつかしい友人、いや恋人にようやくめぐりあえたような印象さえ与えるのが原作の

味であったが、それも良く描かれている。

追跡と格闘、モビーも反撃するが傷つく。

当然、乗組員も何人か犠牲になるが、船長は一步も退かない。「船長、もうやめましょやっかんうや」と、他の乗組員が尻込みする中で船長は最後はただ一人モビーの背中に飛び移り、手に持ったモリを深々と突き立てる。

結局は2人(?)とも死んでしまうのだが、後半の格闘シーンは迫力があるし、船長の男の意地と執念をペックが好演している。

この頃の欧米の捕鯨は食肉目的ではなく、ランプ用の油を取ったりアバラ骨を加工して女性のコルセットにするためであって、鯨油が石油にかわった時点でお役御免、ガス灯、電灯ときてランプさえいらなくなった。

コルセットも石油から造られる合成樹脂が使われるようになったし、ファッションの変化と下着の素材の進歩はコルセットの存在さえ過去のものにしてしまった。

そもそも鯨の肉は食わないところにもってきて、油も骨も必要なくなってから盛り上がったのが欧米の反捕鯨運動である。先頭を切って生態系と環境を破壊してきたバテレンどものいうことに説得力などある筈がない。

ビルマの堅琴

湯島小学校の講堂で見た記憶があるのが、**ビルマの堅琴**（監督・市川崑。主演・三国連太郎、安井昌二）だ。

舞台は終戦を迎えた頃のビルマ（今のミャンマー）、日本兵は次から次へと武器を捨て自ら連合軍の捕虜になってゆく。

そんな捕虜収容所の日本兵、まぶたに浮かぶのは遠い故郷の空や海、山や川、懐かしい父母・兄弟姉妹、そして恋人のこと、そんな思いを込め、音楽好きの士官の指揮のもとで「はにゅう殖生の宿」（貧しい小さな家の意味）を合

唱する。**『はにゅうの宿も 我が宿の**悲しげなメロディーが日本語で流れ、それを聞いた連合軍の兵士が英語で歌い、期せずして臨時の言語国籍多重男声合唱隊が結成される。

殖生の宿の原曲は**Hone sweet home**、アメリカ人ペインの詩にイギリス人ビショップが曲を付けたものだから連合軍の兵士たちが知っているのは当然だが、日本兵たちは日本の歌だと思っていたからさぞや驚いたろう。

歌は世界を結ぶという感動的な実話だが、エピソードはもう一つある。勝者の連合軍兵士も敗者の日本兵もいずれ祖国へ帰る。そんな中で水島上等兵という人だけは、戦友の霊を弔う為に僧侶になってビルマにとどまる。

「水島、一緒に日本に帰ろう」と言う戦友たちの声を振り切って、だ。

竹山道雄のビルマでの実体験に基づき、戦後間もない昭和21年に発表された同名の小説が原作である。抒情に満ちあふれた名作といたいところであるが、ここで強調されている戦場のヒューマニズム、実は日本人に都合良く解釈されているだけなのだ。

水島上等兵の行為そのものは純粋な動機からだろうが、一兵卒がビルマ国内を慰霊に歩き回ったからどうなるというものでもない。

予期せぬコーラスにしても、日本兵が連合軍の捕虜だったからであって、イギリス兵が日本軍の捕虜だったらこうはいかない。

生きて虜囚の辱めを受くるなかれ、つかまるくらいなら1人でも敵を道連れにして死んでしまえ、そんな教育を受けたニッポンの兵隊さんである。武士道にしても愛国心にしても、上から強制され周囲から圧力を受けるからであって、自ら進んでではない。

そんな日本人が捕虜に対して寛大でないのは当然で、ここぞとばかり虐待する。

この逆に連合軍側が捕虜の立場で描かれたのが、翌32年に日本公開されたイギリス映画

戦場にかける橋（監督ディビッド・リーン）である。

太平洋戦争の真ただ中、旧日本軍は軍事目的から泰緬鉄道（泰はタイ、緬はビルマのこと）を強行敷設した。この建設に際し、連合軍捕虜や現地人が強制労働させられ、病気や栄養失調の死亡者数は10万人ともいわれ、国際的な非難が巻き起こった。

「^{はにゅう}捕虜の宿」を歌った日本兵捕虜の中には^{たいめん}泰緬鉄道建設現場で連合軍捕虜を虐待した輩もおそらくいたことだろう。そう考えると純粋に感動もしてられないが、映画そのものは白黒の暗い画面が戦争の悲惨さを良く表現していて、子供心に感動した記憶がある。

捕虜交換の際の取引材料に使えるから手中の敵兵は貴重な財産なのだが、このあたりの合理性と人権感覚は残念ながら日本を含む東洋人やロシア人にはあまりない。

「大脱走」や「第17捕虜収容所」（名作。^{ウイリアム}主演W・ホールデン、アカデミー賞受賞）などで、あのナチスでさえ捕虜を丁重にもてなしているのを見て驚いたものである。

スーパーマン

この年あたりからアメリカ製のテレビ映画が続々と放映されるようになった。

「力は機関車より強く」「高いビルディングもひとつ飛び」「空を見ろ！」「鳥だ！」「飛行機だ！」「あっ！スーパー・マン！」

あらかじめ主人公のスペック（仕様明細）を解説してから番組が始まるのが、ご存じ**スーパーマン**である。

この前置きと共に通り過ぎるでっかい機関車や、ひよろ長い超高層ビルにはそれだけで圧倒されてしまう。何しろこの頃の東京のビルディングはせいぜい8階建て、東京・大阪8時間の特急つばめの時代である。

さらに「そうです、スーパーマンです。遠い宇宙の惑星クリプトンからやってきたスーパーマンは、日夜地球の平和の為に戦い続けているのです」と続く。

昼はデイリー・プラネット（日本語に訳せば惑星日報）に勤める新聞記者クーク・ケントであることも紹介され、バックにはアメリカの国旗がバタバタとはためいている。

こんなイントロがあつて、スーパーマンは始まるのだが①悪いヤツが出てくる②視聴者の期待通り悪いことをする③身内が事件に巻き込まれる④危機一髪⑤変身⑥一件落着と、水戸黄門も真つ青のワンパターンであつた。

ピストルの弾丸など屁とも思わない無敵のスーパーマンであるが、故郷クリプトンのクリプト・ナイトという石には弱い設定になっていて、これがたまに登場する。

そんなスーパーマンであるが、この頃の良いいコたちを悩ませていたナゾがいくつかあつた。空を飛べたり、弾丸をもはねかえすスーパーマンが、クリプト・ナイトに弱いのはなぜだろう？悪人どもはどうやってそれを知つて、どうやって手にいれたのだろうか？

そもそも、なんで惑星クリプトンから地球にやってきたのか？空を飛べるシステムと変身の仕組みは一体どうなっているのか？

同じことをアメリカでも思つたらしく、1979年（昭和54年）に映画化された折に、これらのナゾのいくつかは解明された。特に変身は連続写真でわかりやすかった。

初代スーパーマン役のステイブ・リープス、シリーズ終了後の1959年にピストル自殺してしまい、良いいコたちの夢をものの見事にブツ壊してくれた。2代目のクリストファー・リープも事故で寝たきりとか、このあたりかどうかはわからないが、最近のアメリカ映画、超人的な活躍をする人間は出てくるが、生粋の超人は登場しないのは少し寂しい。

名犬リンチン

この頃のアメリカ製テレビ映画で唯一の子供向け西部劇が**名犬リンチン**である。

シェパード種の犬の名前で、英語では別に妙な意味はないのだろうが、日本語だとやはりおかしく聞こえてしまう。当時の制作部のオッサンもそう思ったらしく、吹き替えではリンチンチンのフルネームよりも**リンティ**の愛称で呼ばれていたものである。

舞台はアメリカの大平原、騎兵隊砦とその周辺、そこにちよつとしたトラブルが紹介されるが、ラスティ少年（10才位）とリンチンチンの大活躍で事件はキツチリ解決する。

例えば、たつた今駅馬車が出ていったが、途中でインディアンが待ち伏せしているという情報が入った、とする。

「大変だア」とあわてる大人たち、ラスティが「それ行け、リンティー！」と言うが早いかダッシュするリンチンチン、危機一髪のところ危うくセーフ、大体こんなワン・パターン・ストーリーの30分番組だった。

リンチンチンのシェパードに対抗して、翌32年にはコリーが主人公の「名犬ラッシー」（～昭和39年）もテレビに登場した。

ラスティと同じような年格好のティミー少年が登場するが、こちらは地味な日常生活がテーマのホームドラマだったこともあって視聴者年令は高かったようである。

今思うと、**名犬リンチン**はその後の子供向けテレビ番組の主流となる**少年フラッシュ**^{パイオニア}の先駆けのような気がする。

少年ジェットにもシェパードの**シェーン**が登場するし、**のび太とドラえもん**に代表される藤子不二夫ものは全部このパターンだ。

他には**丸出ダメ夫**と**ボロット**、**山田ほん太**と**快球X**などがある。（わかるかなあ？）

他にも**金田正太郎**と**鉄人28号**、**兜甲児**と**マジンガーZ**、**鬼太郎**と**目玉の親父**、女の子向けなら**アッコちゃん**と**テクマクマヤコン**などがそうで、相方と力を合わせて主人公の少年は世界の平和を、少女は町内と家庭の幸せを25分以内に守り抜き、晴れ晴れとした顔で空を見上げれば、そこには**つつく**か**終**が雲と雲の間にポツカリ浮かんでいる。

大人顔負けの大活躍をするのも日頃うるさい親や教師へのウップンばらしになるのだろう。その原点が**名犬リンチン**なのだ。

都電とピース

この頃の都内の交通の主役は**都電**である。

都電と都バスを乗り継いで目的地に行くことも珍しくなかったが、この**10円**均一だった運賃が**13円**に値上げされた。いくら1円玉に価値があった時代とはいえ、3円はやはりハンパだ。そこで往復で26円のところを1円お得にした**25円切符**が売り出された。

実際にほとんどの利用者は往復で利用するわけだから、回数券とちがって使い切るのも早いし、2人で一ぺんに使える利点もあって結構利用されたものである。

その都電も今残っているのは早稲田と三ノ輪橋を結ぶ全長**12.2km**の荒川線（かつての32・27系統）のみだが、都バスが**200円**なのに**160円**でがんばっていたりして、時々「東京下町・都電の旅」などとテレビでも取り上げられるのは何とも心強い限りである。

逆に10本入り**45円**に値上げされて大不評だった両切り**ピース**が**40円**に戻された。

40円といえばこの頃のラーメン1杯分だったからタバコといえど馬鹿にならず、当時ピースを吸っていた大人たちが途中でいったん火を消してセコく元の箱にしまっているところを決して見逃さないワシであった。